徳冨健次郎著

蘆花全集
第一卷

人物史傳篇

昭和五年二月刊行

昭和五年二月十二日印刷
昭和五年二月十五日發行

非賣品

蘆花全集

著作權所有者　德富愛子

發行者　蘆花全集刊行會代表　佐藤義亮

印刷所　富士印刷株式會社

製本所　新潮社神田製本部

第一卷

發行所　東京市牛込區矢來町七十一番地（振替東京二七一〇〇）
新潮社內　蘆花全集刊行會
電話牛込（八〇五番・八〇七番・八〇六番・八〇八番・八〇九番）

目次

武雷土

第一章　少　年……一五
第二章　壯　年……一八
第三章　穀法排擊……二一
第四章　愛蘭事件其の他諸問題……三三
第五章　クリミヤ戰爭……三七
第六章　印度事件、米國南北戰爭……四七
第七章　議院改革、武氏三たび內閣に入る……五七
第八章　晩　年……七四
第九章　ブライト氏の公生涯……八二
第十章　ブライト氏の私生涯……九二

格武電

第一章　一生の曉……一〇三
第二章　進歩の時期……一〇九
第三章　自由貿易(其一)……一一三
第四章　自由貿易(其二)……一二〇
第五章　自由貿易(其三)……一二四
第六章　千八百四十六年より同四十九年に至る……一四三
第七章　平和と戰爭(其上)……一四九
第八章　平和と戰爭(其中)……一五七
第九章　平和と戰爭(其下)……一六三
第十章　二年間の退隱……一六七
第十一章　平和主義は戰爭主義と共に俱に內閣に立べき乎……一七三
第十二章　英佛通商條約(上)……一八〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

第十三章　英佛通商條約(下)……一八八
第十四章　終暮の五年間……一九七
第十五章　献身的の政治家……二〇七
第十六章　人物及性向……二一五
第十七章　民政の胎内より生れ出たる双生子……二二一

グラッドストーン

第一章　血統、家庭の教育、イートン校、オックスフォルド大學……二二八
第二章　國會に入る、保守的議論、大藏理事官、殖民次官、ヴイクトリヤ女皇踐祚、虞氏當時の地位……二四〇
第三章　國家と教會の關係を著す、旅行、結婚、商務局次長となる……二五二
第四章　自由貿易に轉ずるの第一着、商務局長となる、辭職、穀法問題の紛紜、殖民大臣となる、ニウアーク代議士を退く、保守黨破れ虞氏辭職す、オックスフォルド代議士となる……二六八
第五章　變遷の時代、二友を失ふ、ドン・パシフヒコ事件、ピール氏逝く、伊太利旅行、

ネーブルス書翰、保守黨勝利、ヂスレリーの豫算案、虞氏大にヂスレリーを破る……二六五

第六章　聯立內閣、出納院長となる、第一豫算案、クリミヤ戰爭、政府の紛紜、巴卿立ち再び出納院長となる、辭職、辭職後の事件……二七九

第七章　虞氏の位置諸般の問題、保守黨政府立つ、ヂスレリー虞氏を籠絡せんとす、アイオニヤに使す、ホーマアに關する著述、保守黨敗れ巴卿立ち虞氏三たび出納院長となる、大豫算案上院との葛藤、米國戰爭……二八八

第八章　巴卿と虞氏、意見の發達、オックスフオルド代議士を退く、巴卿歿しラツセル大宰相となる、虞氏出納院長下院首領を兼ぬ、選擧權改正案、敗北辭職……三〇〇

第九章　保守黨暗中の大飛躍、ヂスレリー大宰相となる、虞氏愛蘭國教廢止の決議案三箇條を提出す、グリーンウイッチ代議士となる、自由黨勝ち虞氏大宰相となる……三一二

第十章　內閣の組織、愛蘭二方案、武官購買廢止及其紛紜、アラバマ事件、物議を招ける兩事件、愛蘭大學案敗北、自由黨の衰微、辭職……三一〇

第十一章　退隱、宗教上の論戰、東方問題、第一ミッドロシアン征伐、再び大宰相となる……三三三

第十二章　內閣の組織、新人物、困難の前兆、愛蘭問題、ビーコンスフイルド伯逝く、埃及問題、蘇丹紛紜、議院改革、辭職……三四三

第十三章　愛蘭自治問題、虞氏三たび大宰相となる、自由黨分裂、愛蘭自治案、愛蘭土地買上案、敗北、辭職……三六一
第十四章　諸般の問題、タイムス對パーネル事件、金婚式、家庭の生活、愛蘭黨の大破裂、議院解散、四たび大宰相となる……三七三
第十五章　逸　事……三八五

歴史之片影

猛鷙旗下の一名將……四〇三
戸外の巴里……四二八
アルフオンス・ドオデー……四三三
記憶すべき英國會の一夜……四四九
伯林所感……四七八
商業界の奈破烈翁……四八三
少年軍……四九四

愛蘭無冠王……五〇六
ペスタロツヂ……五二四
セリダン將軍普佛戰爭手記……五三六
世界の末日……五六二
寫眞派文學の勇將……五七五

口繪

ジョン・ブライト……卷頭
リチヤード・コブデン……卷頭
グラツドストーン……卷頭

挿畫

ウーデンに於けるグラツドストーン夫妻……三八一

武雷土

明治二十二年九月初版

引用書目

William Robertson's "Life and Times of the Right Hon. John Bright".

Speeches by the Right Hon. John Bright.

Justin M'carthy's "A History of Our Own Times".

The Times.

The Spectator.

Pall Mall Budget.

The Fortnightly Review.

The Contemporary Review.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

武雷土傳の卷首に書す

德富蘇峯生

孟子曰、聖人百世之師也、伯夷、柳下惠是也、故聞二伯夷之風一者、頑夫廉、懦夫有レ立レ志、聞二柳下惠之風一者、薄夫敦、鄙夫寛、奮レ乎二百世之上一、百世之下、聞者莫レ不二興起一也と、蓋大人君子の絶大絶高なる品行志操は百世の下、尚活ける感化力を有す、況んや其の當時に於てをや、即ち如溫武雷土氏の如き、其一人たらずんばあらず。

抑武雷土氏は何人ぞや、氏は實に一の醇良、質朴なる平民として生れ、醇良質朴なる平民として死せり、其の生平の如きは則ち左の一文を讀んで、其の一斑を知る可し。

ルートルの電信は吾人に報じて曰く、「ジョン・ブライト氏の疾頗る危篤なりと、吾人は之を聞いて實に心配に堪へず。又報じて曰く、やゝ回復の望みありと、吾人は之を聞いて轉た歡喜に堪へず。思ふにブライト氏の名は、氏が一千八百三十九年十一月六日、非穀物條例同盟會の席上に於て演說を爲したる時より今日に至る迄、殆ど五十年間、英國の政史上に赫々たる明星の光を放ち、今日に於ては

マンチエスターに在る蒸氣機關の火夫も、ニユーカツスルに在る石炭坑夫も、ブライトの名を聞けば、皆歡迎祝祈せざるは無きに至れり。吾人は實に之を悲しむ、我が日本に於ては、却てナポレオン、ビスマルク等の如き種類の人のみ傳稱せらるゝ所となり、却て第十九世紀の情け無き慈悲無き狂犬世界に於て、猶ほ斯くの如き人間らしき人間有るを知らざらんとは。左れば吾人は今日に於いて、聊か氏が人物に就いて一言するも、未だ必ずしも無用に非ざる可きを信ず。

ブライト氏の重なる功業は、實に英國多數の人民を苦しましめたる穀物條例を擊破したるに在り。即ちアダム・スミスが理論上に於て講究したる自由貿易の眞理をば、之れを實際人事の上に活用して、以て其恩惠を人民殊に社會多數人民に被らしめたるに在り。其他選擧法を擴張して職工勞役者に迄、參政の權を與へしめたるが如き、外交政略に於て、干涉主義に反對し奪略主義に反對し、任地、平和の議論を主張したるが如き、或は印度、亞米利加、愛蘭等に關する問題の如きに至つて、氏が關係したる所の者、實に一にして足らず。若し悉く之を語らんと欲せば、我が一年中の「國民之友」を擧げて、其記事に供するも未だ盡せりとせざる可し。吾人は宜しく讀者の英國近世史に就いて、其詳細を知らんことを願ふのみ。

氏が政治世界に出でたるは、初めより功名富貴の念あるに非ず。氏は純乎たる平民なり。氏の父は純乎たる勞役者なり。經營力作、遂に毛氈製造所の長となり、氏も亦た父と俱に此の職業に從事した

るなり。而して氏は何故に政治世界に出でたるか、蓋し其出づるや左の理由有りたるなり。

氏は自ら此事を語つて曰く、

余リーミングトンに在りし時、コブデン君余を訪へり。余は當時實に悲歎、否な絶望の淵に沈めり。何となれば余が家の光明とも謂ふ可き者消え失せたればなり。余が妙齡なる妻は唯其貞婉なる清淨なる生涯と、及び歡樂の甚だ短かかりし記憶とを殘して、最早冷かに、靜かに、余が階上の棺中に横はり居れば也。コブデン君は慇懃に余を慰めたり。而して稍暫くあつて曰く、看よ今や英國に於ては、其妻も、其老母も、其幼兒も皆な飢に迫つて死する者幾千家あるを知らず、若し君が悲歎の少しく醒むるあらば願くは余と共に來れ、而して吾人は穀物條例が取消さるゝ迄は、共に働いて休せざるべしと。

此言葉の氏を感ずるや電氣の如くありしなり。氏は此言葉の爲に政治世界に入りしなり、其心事又察す可きのみ。

凡そ氏を知る者は、氏が雄辯家たるを知らざる者なし。實に氏の演說は第十九世紀の英國に於て、殆ど第一流とも謂ふ可く、直ちに其武をチヤタム、ホルク等の諸大家に接すると云ふも、敢て誇言に非ず。氏は嘗て希臘、羅甸等の古學を修めたるとなし、瑰麗の辭、典雅の詞を用ゆるとなし。氏の片言隻語は、皆平々たる純粹のサクソン語にして、職工勞役者も之を聽いて樂む程なりと雖も簡練、高

潔、透明、斬新、其躰に溢れ、目に閃き、口より發する所の者は、實に堂々として人を動かせり。而して其の音吐高爽にして然も其餘韻悠揚、恰も微妙の天樂を聽くが如きの趣有りとす。氏の演說の一種獨得の妙と云ふ可き者は、其熱情を發揮するに非ずして、寧ろ含蓄するに在り。氏は滿引す、然れども敢て放たず、史家之を評して曰く、氏の演說は白熱の如く猛烈なり。然れども敢て炎々たる火焰を出さずと、是れ實に氏が演說の妙なる所以にして又以て其人物を知るにたらん。

氏が始終進退を共にしたる者はコブデン氏なり。而して氏と始めて其互に相傾倒してより、コブデン氏が死するに至る迄、常に左提右挈して、政治世界を馳驅せり。此の間凡そ二十餘年、未だ曾て一回も兩人の間に芥蔕を挾むとなく、其交情の淡なる、清水の如く、敵群にも兩人にて之に當り、月桂冠も兩人にて之を戴けり。英國の近世史上に於ては、コブデン、ブライトの名は、恰も一人の如く、常に聯環して相離れず。人或は今日に於て二氏の優劣を論ずる者あれども、吾人は寧ろ二氏の優劣を論ずるよりも、實に名奔利走の燒點たる政治世界に立ちながら、斯くの如く其交情の始終相渝らざるの事實に感嘆するのみ。天下廣しと雖も、古今遠しと雖も、斯くの如き者は、吾人得て之を見ず、唯支那に於て、管仲、鮑叔あり、英國に於て、コブデン、ブライトあるを知るのみ。又以て二氏の人物の流俗の外に卓然たるを知る可し。

然りと雖も、其蹟に就て人物を評するは、未だ人物の眞價を知らざる者なり。世或は心賤くして、

其行清き者あり、俗物にして、英雄らしき行を爲す者あり、英雄にして常に英雄の行事を發揮せずして終るとあり。ブライト氏の如きは、其五十年間の履歴に就て之れを評するも、誠に一世の政治家たるに恥ぢずと雖も、吾人をして氏を愛慕せしむる所以の者は決して之に非ず。若し夫れ行蹟に就て之れを評せんか、ブライト氏の如き事業を爲したる者、若しくは氏よりも更に偉大なる事業を爲したる者、誠に少しとせず。凡そ氏と前後に政治社會に縱横たしる英豪少しとせず。ピールの如き、パーメルストンの如き、ヂスレリーの如き、グラツドストーンの如きは、其最も錚々たる者なり。是等の人物素より皆自ら立てる位置に於ては、各々第一流の人物たりしに相違なかりし也。ピールの練達なる、パーメルストンの權謀ある、ヂスレリーの奇矯なる、グラツドストーンの機を見るに長ずる、是れ皆ブライト氏が一着を輸する所ならざるはなし。而して猶氏が此間に在つて、矛を立て隊を拔き、敢て自家の風味を存する者は、抑も何ぞや、是れ實に氏が心事の清淨嚴肅なるに在るのみ、忠厚眞摯なるにあるのみ。英國のクリミヤ戰爭に於て、露國と事あるに際し、氏はコブデン氏と共に之に反對せり。而して此反對の爲に、今迄背上に堆積したる人望を失ひ、剩さへ氏が最後の城廓とも謂ふ可きマンチエスターの選擧區をも失へり。而して此反對の爲に、氏は暴民よりして、氏の旅宿の近傍に於て、氏が像を造り、罵詈聲中に之れを燒かれたり。此の反對の爲に、氏はパルメルストンよりして、議院群衆の前に於て、尊敬す可き和尙と嘲弄せられたり。氏がグラツドストーンの內閣に立つや、埃及の事あるに際し、氏は

又良心に於て忍びずとて職を辭せり。而して之れが爲に又幾多の非難を輿論に蒙りしや、擧げて數ふ可からず。而して人皆氏が一生の行事に就て之を評して、坊主臭き政治家と云ひ、偏窟なる政治家と云へり。吾人は敢て今日に於て、其果して然るや否やを論辯せずと雖も、若し果して氏を以て偏窟なりとせば、偏窟なる所こそ、却て氏が安心立命の地位にして、之れが爲に一個のブライト在りと謂はざる可からず。今日の政治世界は、人をして皆臨機應變者たらしむ。今日の政治家の弊は、堅きに非ずして、丸きに在り。偏窟なるに非ずして、偏窟ならざるに在り。而して氏が如き者此間に立ち其の良心に恥ぢる所は、敢て之れを爲すに忍びず。帝王にもあれ、大將にもあれ、新聞紙にもあれ、演說にもあれ、國會にもあれ、輿論にもあれ、陸海軍人にもあれ、何人に於ても何物に於ても、其意見を異にしたる時には、之れに反對するを猶豫せず。而して陰に反對するに非ずして、公然と、堂々と、有體に、其反對す可き所以を示し、敢て敵の强弱を擇ばず、唯自家の信ずる眞理を執つて變ぜざるが如き者、世豈に其類ひ有らんや。今日に於て淸教徒的の政治家は、唯氏に於て其典型を存せり。氏にして若し死せば、或は恐る、世人をして正直者は政治家と爲る能はざるの歎を發せしめんことを、吾人が氏の疾を聞いて心配するは素より此に在り。氏の回復せんとするを聞いて喜びに堪へざるは素より此に在り。而して平生氏を尊信して止まざるは素より此に在り。

吾人は正直者にてさへあれば、直ちに政治家となるを得可しと云ふに非ず。勿論政治上の駈引に於て

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c